第 106 回　歴史リレー講座「馬見丘陵の大型前方後円墳」　岸本 直文氏（R5.7.16）

奈良盆地の西側には 200m超の大型前方後円墳が多数あります。古墳時代（3 世紀から 6 世紀）の前方後円墳は、倭国王墓だけではなく、北は岩手県から南は鹿児島県まで、倭国の枠組みに加わる各地の有力者も共有する墳形でした。古墳は生前造墓で、倭国王は即位すると王墓である前方後円墳を設計・築造し、各地の有力者も、その設計をもとに同じ形の前方後円墳を、身分に応じた規模で造りました。私はこれを「前方後円墳共有システム」と名付けました。また、大型前方後円墳には濠がめぐり、水を溜めており、古墳は「島」と見做されていました。ただし、実際に水が溜まるかどうかは地質により、例えば堺市の大仙古墳の濠には水が満々と湛えられている一方で、藤井寺市の仲津山古墳は空濠状態です。ちなみに、みなさん驚かれるかもしれませんが、私は大仙古墳の被葬者は仁徳天皇ではなく允恭天皇であると考えています。

何らかの理由で工事が中断したと考えられる古墳もあります。岡山県赤磐市の両宮山（りょうぐうざん）古墳は大仙古墳を模した大型前方後円墳ですが、墳丘は仕上がっておらず葺石や埴輪もなく、未完成のままです。松原市と羽曳野市にまたがる河内大塚山古墳も前方部ができあがっていません。当然、王は葬られていません。これらからも、古墳が生前造墓であることがわかります。しかし、646 年に大化の薄葬令が発布されます。これにより限られた上位の人しか古墳は造れなくなり、また墳丘や墓室の大きさも小さく制限されます。これ以降、死後に墓が造られるようになります。

実は、倭国王墓には神聖王系列（主系列）と執政王系列（副系列）いう、構造や形の異なる二つのタイプがあります。なぜでしょうか。それぞれ異なる役割を担当する二人の王が存在したからというのが私の説です（祭政分権王制）。神聖王系列は桜井市の箸墓古墳（卑弥呼の墓）に始まり、仲津山古墳・大仙古墳などがあります。執政王系列は桜井茶臼山古墳を起点とし、津堂城山古墳・上石津ミサンザイ古墳・誉田御廟山古墳など。古墳時代中期の 2 系列では、微妙ですが、主系列の方が前方部が長めで、副系列は短めです。二つの系列が一本化するのは 6 世紀の継体天皇からです。

倭国王墓はモデルチェンジを繰り返し、各地の有力者が類似墓を造りましたが、この 2 系列にあてはまらない第 3 系列があります。この独自の前方後円墳が、馬見丘陵一帯に築造されているのです。築山古墳（大和高田市）、巣山古墳（広陵町）、島の山古墳（川西町）、川合大塚山古墳（河合町）、などです。まず馬見丘陵最南端の築山古墳は、天理市の渋谷向山古墳（景行陵）に基づいて造られたもので、前方部が長く、またあまり開きません。次に、築山古墳のあと、同丘陵中央に位置する巣山古墳が築造されます。近年かなり整備が進んでいます。また、馬見丘陵から少し離れた島の山古墳も、築山古墳にもとづき築造され、巣山古墳と同時期の古墳とみられます。大阪の津堂城山古墳と同じ頃のものです。

しかし、巣山古墳南側にある次世代の新木山古墳は、第 3 系列でなく、古市古墳群の主系列墳である仲津山古墳を模したものと考えられます。2010 年に行われた宮内庁の発掘調査で、野焼き段階の埴輪が検出されました。巣山古墳に後続する第 3 系列墳は、大阪府岬町淡輪の西陵（さいりょう）古墳、そして奈良市の佐紀古墳群中のウワナベ古墳で、馬見丘陵にはありません。しかし再び、ウワナベ古墳のあと、馬見丘陵北群に最後の川合大塚山古墳が築かれました。

これら独自の第 3 系列を生み出したのは馬見丘陵一帯を地盤とする葛城氏集団ではないでしょうか。外戚として倭国王とも肩をならべる力をもち、独自の前方後円墳を築造することができたのだと思います。しかし、新木山古墳、室宮山古墳（御所市）の頃には王権との関係が深まり、倭国王墓のシステムに組み込まれたようです。が、それも次世代には継続せず、再び第 3 系列である川合大塚山古墳が築造されます。奈良盆地西部のこうした古墳の推移から、『日本書紀』に書かれた葛城氏集団への弾圧記事もふまえて、奈良盆地西部の葛城氏集団の盛衰を読み解くことが課題です。